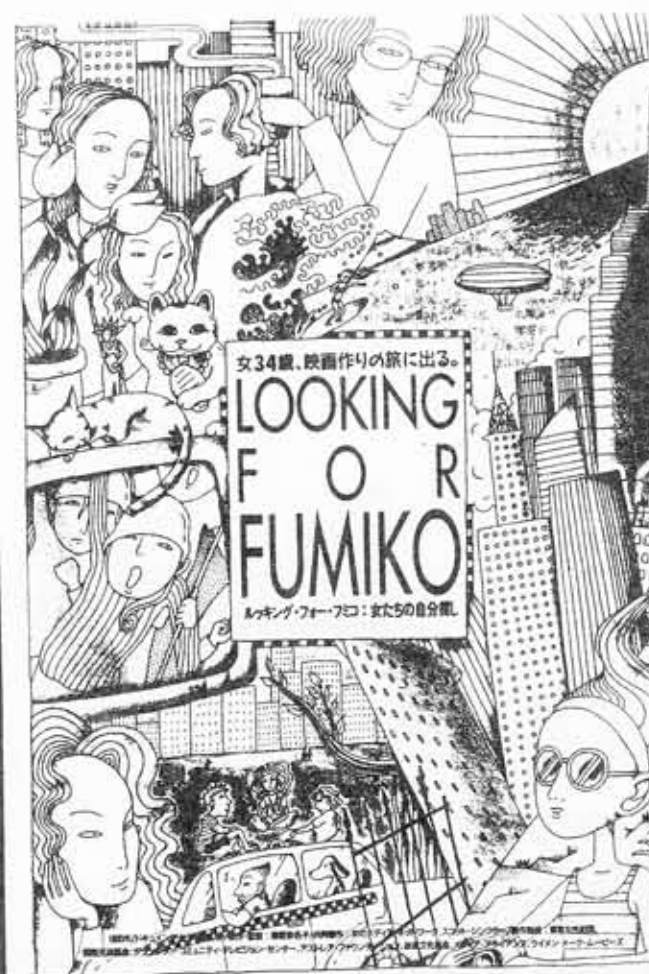


ばってんうーまんの会が今年お贈りする映画
「ルッキング・フォー・フミコ」の
 上映会の詳しいお知らせです。
みんな誘い合って見に来て下さい!!

6月28日(木) 6:30~7:30 pm 映画 7:30~9:00 pm 監督講演



前号でもお知らせしたように、私たちは
 今回の「如トコ」の収益金で映画を
 上映することにした。

この映画はNYに住む若い女性が
 「フミコ」という友人の死をきっかけに
 日本のウーマン・リブ運動を探る旅に出る
 話です。70年代初め、ウーマン・リブを
 真近に見た人もそうでない人も女の問題
 を考える時、避けては通れないものとして
 今度その実態を知てほしいと思っています。

34才女性監督栗原奈名子さんの
 講演も企画しています。NYの男と女
 最近事情を聞いてみませんか?

入場料 **500円**

(一般の映画代もこう安いものだ)

NBCビデオホールにて

LOOKING FOR FUMIKO

ルッキング・フォー・フミコ：女たちの自分探し

●サンフランシスコ国際映画祭(米国)サティフィケート・オブ・メリット受賞
●全米教育映画ビデオ祭(米国)多文化主義部門ゴールド・アップル賞受賞
●クレタ女性映画祭(フランス) ●シドニー映画祭(オーストラリア)
●ボンベイ国際映画祭(インド) ●ロンドン映画祭(英国)
●マーガレット・ミード映画祭(米国) ●シンガポール国際映画祭 ●ほか各国映像映画祭に招待



解説

ひとりの日本女性との出会いからニューヨークに住む監督が日本のウーマン・リブ運動を探る旅に出る。70年代当時マスコミから否定的に扱われ、わずか5年で社会の表面から消えていったリブ運動。その本当の姿は未だよく知られていない。いったい何を求める運動だったのか。日本社会はどのような影響を受けたのか。関わった人たちは今どんなふうに生きているのか。カメラは当時のリブ参加者5人を追って日本へ。様々な人生を生きてきた彼女たちの暮らしと、その言葉から、四半世紀の女性史が垣間見える。ふんだんな資料映像が当時の熱気を伝え、単刀直入なインタビューがリブ運動の感性と思想を明らかにする。「女として私はどう生きたいのか」を追求し続けた人たちの姿をみずみずしく描いたパーソナルなドキュメンタリー。



撮影：森田千(フリー映画センター)

※

「心奪われる作品」

——「ニューヨーク・ニュースデイ」——

「激しくパーソナル」

——「フィラデルフィア・エンクワイアラー」——

「とても深く美しい作品」

WBAI-FM放送

すいせんのことば

「もし日本にリブがあったことを知っていたら、わたしは日本を去らずにすんだかもしれないに……」ナナコのつぶやきは、わたしの胸にささる。ナナコの思いはこのニホンを息苦しく感じる多くの女たちと共通の思いだ。そしてリブがこの国にたしかにあったことを、そしてそれがいまもしっかり根づいていることを、伝えられないわたしたち年長の女たちの非力の証だ。「あとから来た世代」のナナコは、リブのドキュメントを映像で表現するという、わたしたちの世代が思いつかなかった手法をとった。「Is there such a thing as feminism in Japan?」……と問いかけるすべてのニホンジョンおよび非ニホンジョンに見てもらいたい。

上野千鶴子(東京大学助教授・女性学研究者)

※

年ごとに数を増す世界の女性映画監督に比して、日本の女性監督はほんのひと握りにすぎません。1985年に生まれた東京国際映画祭の国際女性映画週間のプロデューサーに私がなったのも、日本に女性監督がどんどん生まれてほしいという願いをこめてのことでした。栗原奈名子さんの「ルッキング・フォー・フミコ」を拝見して一番うれしかったのは、このように元気で優秀な女性映像作家が誕生したこと。栗原さんは少額ずつの資金を粘り強く集め、ビデオによって長年の思いを実現されました。この映画作りは、後につづく女性たちを力強く励まし、勇気を与えてくれることと思います。第二、第三の栗原さんの出現を、私は心待ちにしています。

高野悦子(岩波ホール総支配人)

監督メッセージ

大和史子さんがカビー・ホール(小熊の穴)と呼ばれるニューヨークの私の極小アパートに現れたその瞬間から私の人生は突如スイングしたのでした。仕事もしたいし、ラブ・ライフも充実させたい、おいしいものも食べたいし、おしゃれだってしたい。とにかく自分の人生を生きたい。そんな私達は、日本に飽きたらず、各自ニューヨークにやってきて出会ったのです。下ネタから政治経済までどしどし本音で話すけれど、距離もわきまえた史子さんは、私の人生最大のソウル・シスターとなりました。日本人離れしたオープンさも、彼女が昔ウーマン・リブ運動に関わっていたと聞いて、よく知らないまま納得していました。だから、突然彼女がいなくなった時に私に唯一できたのは、いったい彼女がどこからやってきたのかをたどることでした。それがこのドキュメンタリーです。太平洋を渡った日本のウーマン・リブ・スピリットをニューヨーク経由で皆さんにお届けします。

監督プロフィール/栗原奈名子

早稲田大学政経学部卒業後、雑誌編集者として活躍。1984年、ニューヨークに移り住み、現在に至る。本作で撮影・共同編集を担当したつれあいのスコット・シンクラーと二匹の猫、アトムと曜とともにマンハッタンで暮らす。



1993年/16ミリフィルム・ビデオ/ドキュメンタリー作品/57分/製作・監督：栗原奈名子/撮影：スコット・シンクラー/共同製作：女のメディア・ネットワーク、スコット・シンクラー/製作助成：東京女性財団、国際交流基金、ダウングラウン・コミュニティ・テレビジョン・センター、アストリア・ファウンデーション、放送文化基金、メディア・アライアンス、ウイメン・マーク・ムービー・イラスト：平尾安美子/原題：「Ripples of Change」/©栗原奈名子/問い合わせ：瀬シグロ 〒164東京都中野区中野5-24-16中野第2コーポ210 ☎03(5343)3101

6月28日(水) 会場：NBCビデオホール ばってん・うーまんの会

観覧料 500円(好評発売中) 〒850長崎市上町1-35 Tel:(0958)26-5300
原監督による講演会にも、同一場で入場できます。

| | |
|-------------|-----|
| 6:30-7:30pm | 映画 |
| 7:30-9:00pm | 講演会 |

事務局
津田尚美

新学期 楽しかったアンケート.

葛西 よう子

工学部卒の私大。という事は女子学生は5%位しかいない大学。で「女性学」を講じているが、何と今年受講生が350人押し寄せた。これは授業は出来ないので大変急、プリント用紙を作成。書いてもらう。なんと「女性学」を受講した理由は、女性学で学べる事をわかりたい。そして「女性学」の勉強から。しかし、女性の考え、立場を知りたい。とは結構ではないか。うれしくなった。

そのアンケートの中身少々紹介したい。いつかのアンケートの中身3つ程、のべてみる。

質問：「男は外、女は内」という言ひに対して どう思いますか

すべて男子学生の答えである。大部分の学生は「古い」「ちがう」とまずズバリ書いてくる。「差別だ」とは、3割書いてくるが数人だけ。「どちらが外でどちらが内でもよい」「男も女も外」「僕には女が外の方がいい」「そんな勝手な言ひが通るのか」「男は家の母に反対、父の態度が許せない感謝しろ！」と、決定打は「男と女の違いは内外的だ」「男も女も同じ人間なんだ」というアンケート。しかし「やっぱり家の事は事が家庭にいてほしい」とか「女は外で男は内」がまた二枚。現実を良く知っているなあ～と思ふのが「女も金を稼いでほしい」

質問：「夫婦別姓」という言葉を聞いた事がありますか。将来結婚したら時はどうしますか

ほとんどの学生が「初めて聞いた」「知らない」と。何となく同性がよいなあ～と、今迄悩んでいるからと習慣の根拠を感じさせる。しかし、ほとんどの男子学生がこうつけ加えている。「彼が別姓が書いてある別姓にする。やさしいんだなあ～」。でも男にまつたものは男の考え「結婚出来るか、どちらが問題だ。出来る事になるか考える」

10数人いる女子学生は全員別姓。やはり工学部に来る女子学生は覚悟がちがう。(その覚悟がちがうという所に私はひらかる。どうして女は工学部なの。どうして工学部の女が女子ではないの!)「一生働くから当然別姓」「専攻を生かして働くのだから別姓で行く」という人とは結構違う。「自分のアイデンティティは守りたい」

質問：「家制度」は今の社会とどこに感じていますか

結婚式、葬式、一家の墓、金のおうち。と平凡な答えが並び、しかしほとんどの学生が

「家制度」何ですか。はじめて聞いた」といっている。

「男だからと言われると、グーフと来る」「～さんの息子さんと言われると嬉しい」。おもしろいのは「熊鷹式」のビデオ撮影のバイトをしているのが毎日とても感じて仲になっている」

ウワ～、言っているとは感心したのは「天皇、ヤクザ、大企業の大社長」と大文字でガバッ!と書いてマーケット用紙だった。そして「各省庁のたてわり行政は家制度のほら」ともあった。

この案の頭脳をもった学生連が企業に入社時「男だからかみはね」と言われつけ、同期入社の子社員にエッセイをとってもらう間に、男社会の中にどうぶつづらで行くのか。いや、やっぱり何の。今迄と異なる社会を作るサレてゆくのか。

「い、世の中、やっぱり変りつつあるのだ。とニコニコとコメントを私は読みつづけた。

東京の須藤さんより

右のようなお便りをいただきました。

4月から編集を担当することになり、慣れないうちで会報作成に四苦八苦しています。今更ながら前任者の苦勞に身にしみて感じています。ついつい会報の出来が思わぬばかりに申し訳なく思っています。右のほうを励ましのことばを聞くと、やっぱりがんばるという気になりますね。須藤さんめがどうだったか。

四月二十日

この方も終わり、つづきのまーしきり
と迎えるそのあね。
いつも会報を、ありがとう、しきり
長く続けよう努力に頭が下ります。
ゆつくり拝見させて
いただきます。皆様
健康に気をつけ
頑張って下さい。

須
友

